

# OMEGANE vol.2



日常の、目に触れる物から浮かぶアレコレ。

p2  
『小村雪岱とその時代』展



p2  
『抱きしめたいデザイン』



p3  
『Blue』 中村祐介



p3  
ショーン・タン の作品



p4  
例によって古本屋の書棚を眺めていると向こうから手が伸びてこちらが引き寄せられるという本がある



p5  
おやすみなさい。良い夢を。



p5  
『紙とデザイン』



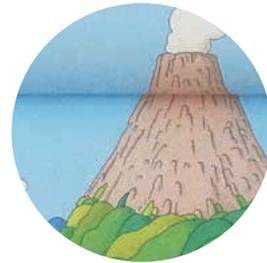
p6  
『紙だからこそ感動』



p6  
着眼点の面白さ 着想の柔らかさ



p7  
『本』である事の面白さ。



p7  
『アイ・ラブ・カラフル・料理の本』



p8  
『旨いを贈る 日本のお歳暮』



p8  
『自分の体の事、知ってます?』



p9  
一青窈アルバム新聞広告

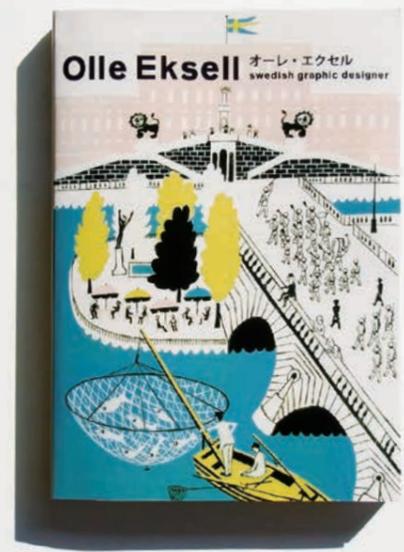


p9  
HERMÈSカタログ



p10  
白川義員 世界百名山





# 絵

ゆっくりと眺めたい  
大好きな色、  
気になる形。

## 『小村雪岱とその時代』展 山田純一

2009年12月15日から2010年2月14日まで、埼玉県立近代美術館にて催された小村雪岱展に「偶然」行った。

全くの予備知識無し、偶然とたまたま、気まぐれが重なって行った美術館でやっていた展覧会でした。

美術系の雑誌で特集されていた事だけは覚えていて、最近の日本画家かな。くらの感覚でいました。オムラセツタイだと思い込んでいたら「コ」ムラセツタイと読むらしい。

そこまで無知だった事もあってか、先入観やよけいな価値観を待たずに作品を見る事が出来て、純粹に感動出来てとても良かった。というか、若干興奮気味に、静かな（人もまばらな）フロアで一人、舞い上がっていました。

泉鏡花の著書の「装幀」のクールさにクラクラ。「カッコイイ!」

人を描いていないのにドラマチックな「風景画」にガクガク。「カッコイイ!!」

アングル、トリミング、場面描写、細筆で描かれた挿絵にアワアワ。「カッコイイ!!!」

つんと澄ました日本美人の描画にドキドキ。「モエー————!!!!」

人一倍「絵」や「イラスト」を見て来た（と自負する）僕が、久しぶりに「絵」を見て盛り上がりすぎてしまった。

明治、大正、昭和と生きた、マルチ日本画家・小村雪岱。その名を深く心に刻みました。

「絵」を武器として縦横無尽に腕を振るい、装幀から挿絵、デザイン（資生堂に在籍していた）、舞台美術と、多彩な活躍をしてみせた雪岱。

カッコイイ……。 (photo 1,2)

### 「抱きしめたいデザイン」

沢田寛子

日々目にする色々な雑誌や本、広告や中吊り。思わず惹きつけられる人や物、形や色。

そして形や色でも、「ちがう、ちがう、私がいいと思うのもっとこういう感じで、こういう色…。人それぞれの「こういうの」というのはあるはず。

好きな色や形は、いつ頃から芽生えるものなの？ その人にとって「ピタッ」とくるものはどこからくるの？ でもそれに出会った瞬間、思わず立ち止まってしまい、昔から知っていて、ずっと会いたかった懐かしい大切な友達と再会したような衝撃を受けます。

子供時代をスウェーデンで過ごしました。その時に見た色なのでしょうか、感じた形なのでしょうか。オーレ・エクセル氏を見た時に、この懐かしさがこみあげてきたのです。

スウェーデン人のグラフィックデザイナーのオーレ・エクセル氏は1918年生まれで2007年に89歳で亡くなっています。

14歳の頃からすでに広告の仕事に憧れていたオーレは第二次世界大戦開戦の年に開校したアートスクールに入学し、世界大戦の終わった翌年には当時グラフィックデザインの先進国だったアメリカに渡ります。「新しい世界を見たい」そんな思いを携えてわくわくしながら大西洋を渡ったことでしょう。

「グッドデザインは単に美しいだけでなく経済効果もあるものである。グッドデザインは単に美しいだけでなく非常に真剣なことである」お菓子メーカー・マゼッティの国際コンペに優勝したこのシンプルな「目」はそのことを語っています。

オーレは自分で肖像画を描くのが苦手、と言っています。でもなぜか鳥をモチーフにすると、その人の特徴を上手に表せたそうです。面白いでしょ。どの作品も「じーっ」と見ていると引き込まれます。

温かいなあ〜、優しい気持ちにさせられます。愛情がいっぱいです! (photo 3,4,5)

## 「Blue」中村祐介 飛鳥井羊右

イラストレーター 中村祐介さんが2009年にイラスト集を出されました。

イラストを初めて見たのは2003年〜04年頃。ASIAN KUNG-FU GENERATIONというバンドのCDパッケージでした。(photo 7) 曲が好きで買おうと思ったのですが、歌詞カードのイラストがすごくかっこよくて、イラストも好きになったのです。

近年書籍の装幀などに使われたり、テレビで紹介されたりと、目に付く機会が増えていすので、すでにご存知の方も多いと思います。

はじめ見たとき、スムーズできれいな曲線とフラットな色面…デジタルで作画したものかと思ったのですが、その雰囲気には違和感が…それもそのはず、手描きだったのです。

パソコンで描くと均一な太さの線になるのですが、手描きだとその均一に見える線に微妙な「揺れ」みたいなものが表現されるのだと思います。今はデジタルも使うようですが、手描きの雰囲気は少し残しているため、冷たくなりすぎないクールさ（矛盾した表現ですが…）を感じます。

ま、画材うんぬんよりも、色々なモチーフを組み合わせたコラージュ的畫面構成! このセ

ンスの良さにやられましたね。こういうのはこれこれこうすれば…みたいなものが無いのだと思います。描き手のセンス、それを表現する画力。その両方がなければ成り立ちませんね。

なんだか懐かしいような、でも新しい。僕のお気に入りのイラストレーターさんです。今後も注目して行きたいと思います。(photo 6,7)

## ショーン・タンの作品 山田純一

shaun tan オーストラリア生まれ

圧倒的な絵力を持つ、次元の違う絵描き。自分と同年である。

「アライバル」には4年を費やしたというから作品に対する熱量も半端ではない。「遠い町から来た話」は古今東西の様々なタッチで描かれた小片が15作品納められている。器用を通り越して神業の域だ。

しかも、そのどれもが「なんちゃって」というレベルではない。経歴には短編アニメーションでアカデミー賞の受賞とも書いてある。

……同年か……。自在に絵が描けたら相当楽しいだろうなあ。この二冊、先週、紀伊国屋書店で購入して

落ち着いたらゆっくり見ようと思っていたので傷保護の為のビニールカバーもつけたまま、部屋の本の山に積んであった。

朝、お気に入りの発表の場でビニールを破り、初めて広げてみたくらいだ。なので、物語の方は立ち読みくらいの把握しかしていない。今日すぐに持ち帰って、……落ち着いたらゆっくり見てみようと思う。

国内のイラストレーターにも勿論アンテナを立てているが数年前から海外の絵描きにも興味を沸いて来た。近頃は、日本の漫画やアニメにインスピレーションを得たアジアの絵描きを描くイラストも非常に達者で世界観や、色合いなど、バックボーンの違ひからにじみ出るオリジナリティーなどが新鮮で目を見張る。中国、香港、台湾の中華な空気や美的感覚。マレーシアやベトナムなどは、アメリカやヨーロッパの文化も混じり何とも言えない独特な雰囲気が有る。近頃はネットをはじめ、流通もグローバルで海外の絵師が自主制作する「同人誌」も手に入ったりする。ますます、絵好きにはたまらない環境だ。出費も激しいが、部屋も随分と激しい事になっている。

願わくば、自身の絵レベルも上がると良いのだが。。 (photo 8,9,10,11)

# 本

魅力的な本たち。  
秘密はブックデザインにあり？

例によって古本屋の書棚を眺めていると  
向こうから手が伸びてこちらが引き寄せられるという本がある  
堀木一男

例によって古本屋の書棚を眺めていると  
向こうから手が伸びてこちらが引き寄せられるという本がある

1冊は 椋鳩十「夕焼け色のさようなら」  
伊那谷から北アルプスに沈む夕陽の装幀で  
児童文学界の重鎮である著者を理論社の社長の小宮山量平自らが  
編集して作った本だ 副題が 椋先生が遺した33章 になっている  
椋さんが亡くなったのが1987年とあるからもう四半世紀前の本だ  
亡くなった椋さんを追悼して作ったものだろう  
こどもならず大人達まで魂をぎゅっと捕まえてしまう椋文学は  
どこまでも息づかいがナチュラルだ  
力んだりミエを切ったりというところがなくほのぼのとあたたかい  
装幀もサインペンでかいたような柔らかいタッチの書体だ  
多少野暮であり格好よさを求めている  
そのままが大事にされている デザイナーにとっては難しい  
装幀ではないだろうか  
書名はアルプスの少女ハイジに出てくるお爺さんの言葉である  
この世でもっとも美しいのはお日様が全てのものに  
さようならのあいさつする夕焼けだよ からきている  
小宮山にとって椋こそ少年たちの魂に語りかける術を持った  
お爺さんであり太陽だったのである 人間の美しさとは何か  
心とはなにか 深いところが浸みる

もう1冊は 覚和歌子「ゼロになるからだ」  
この本は装幀がナチュラルなものを提出しているが  
椋の本とは対極のデザイナー好みのシンプル志向である  
異形の粘土の面と空間たつぷりのさっぱりした空間が気持ちよい  
感覚を捕まえる計算が何もないうところに隠れている  
都会的で洗練がある  
生きている不思議と死んでいく不思議を両方から  
思い描く気の流れが横溢しているみずみずしい物語詩だ

そのひとを愛するときは  
死んだ人を思うように  
けれどいつかまた逢えたら  
やっぱりめっちゃくちゃにだきしめてしまおう  
そのときはもう  
大切なものをわざとすこし乱暴に扱うように  
背中なんかを ばんばんたたいて  
あなたが本当に死んでなくてよかったと  
そのことだけで うれしいといい  
・・・

という感じで歯切れがいい  
ふと最後の詩をみたら いつも何度でも  
と書いてあった  
呼んでいる 胸のどこか奥で  
いつも心躍る 夢を見たい  
・・・

あの 千と千尋の神隠し テーマソングの作詞者であった



『おやすみなさい。良い夢を。』  
田島未久歩

今年の夏、初めて東京国際ブックフェアに行ってきました。お台場にある国際展示場の広い空間に、とにかく本、本、本。図鑑や絵本や洋書など、様々なジャンルの書籍をつまみ食いをするようにちよこちよこ楽しみながら歩いていたら、装幀コンクールというコーナーに辿り着きました。そこには造本装幀コンクールの入賞作品が並んでいて、どれも目の覚めるような、素敵な装幀の本ばかり。そこで、『おやすみなさい。良い夢を。』という本を見つけました。

手にした瞬間、お気に入り決定。うまく言葉にできませんが、装画も、紙も、重さも、すべてがタイトルの『おやすみなさい。良い夢を。』という言葉に「ピタッ」とつながっているような感覚です。そして帯が上がっちゃってるなと思って下ろそうとした時、ハッとします。カバーと帯がひとつの紙で、折り返されているのです。この宙に浮いているような無重力感も、ふとんに包まうとうとうしている時間とそっくり… (のような気が)  
他にも、花切れがパジャマの柄のようで可愛かったり、のどに控えめに色が差してあったりなど、嬉しくなってしまうアイデアが随所に散りばめられています。これだけ盛り沢山だと押し付けがましくもなりそうなのに、そうっていないのが不思議ですが、様々なアイデアが集まったその中心に『おやすみなさい。良い夢を。』という言葉が芯のようにずっと一本通っているからではないかと思えます。が、本当のところはどうなのでしょう…？ たくさんのアイデアをまとめる方法、とても気になります。デザイナーの方にお聞きしたいところです。

ところで、そのデザイナーさんに関しましてもううれしい驚きがありました。私が以前にお気に入りとして紹介させていただいた『ku:nel』と、今回のお気に入り、どちらも有山達也さんが関わられているデザイン！  
気づいたのはつい最近。「あ～やっぱり惹かれてしまっただなあ」と、うれしくて、ちょっとくやしいような気もする発見でした。

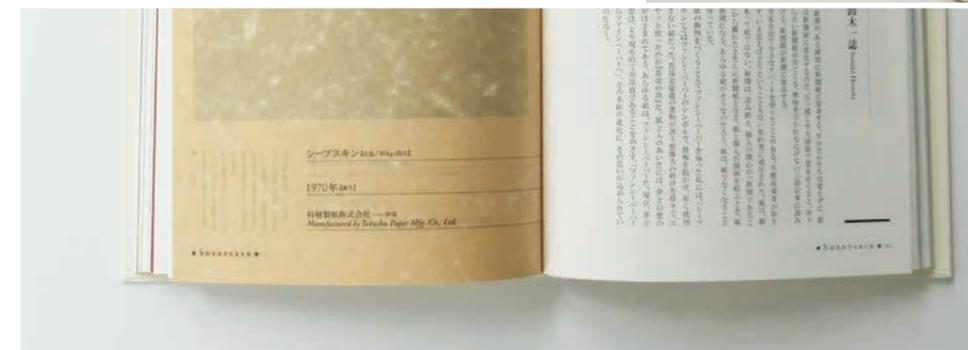
『おやすみなさい。良い夢を。』というタイトルですから、もちろんベッドに横になって読んでみました。すると、ふんわりした軽さは腕を疲れさせないし、帯がずるずると落ちてくることもないし、ゆったりした文字組は気持ちを落ち着かせてくれる。やっぱり、「ピタッ」としていますね。

『紙とデザイン』  
飛鳥井羊右

株式会社竹尾 創立100周年記念  
紙とデザイン  
竹尾ファインペーパーの50年  
2000年刊  
株式会社竹尾の100周年記念の社史です。  
その中の企画に50年の歴史を持つファインペーパーを、竹尾社ゆかりのデザイナー50人が1人1銘柄（計50銘柄）を選び、その紙にまつわるエッセイと共に紙を使用した作品を紹介しています。

箱入りの上製本（ハードカバー）で、竹尾の見本帖本店で売っていたようです。僕は印刷博物館のミュージアムショップで買いました。この本には並製本（ソフトカバー）もあり、そちらの方が安いのですが、上製本にはファインペーパー50銘柄の紙（実物）が見本として綴じられています。デザイナーが紙について語り、その紙を使った作品が掲載され、実物の紙が綴じられている。  
これだけ多種の紙を使った本は、とても贅沢な作りだと思います。

普段、仕事で紙を選ぶ機会がそれほど多くある訳ではないのですが、選ぶ機会があるときには、デザイナーとしての提案という形でなにかできたら良いなと思いました。



# 視覚的な面白さ

「紙だからその感動」  
大友淳史

小さなサイズの箱形の物。店頭を見た時、最初は何か分かりませんでした。



実はコレ、パラパラマンガなのです。ばらばら一つとめくと絵が動いて見えるというアレです。教科書の端っこに描いた経験のある人も多いのではないのでしょうか。

僕も昔、教科書の端っこに描いた経験があります。

今回紹介する「パラパラボックス」シリーズはとてもクオリティが高く、雰囲気も好みです。中でもお気に入りなのは「目からかいてこうせん」本には「目からビームが出るよ」と書かれています。



実際にめくってみるとこれはビックリ!



めくった際の残像がビームに見えるのです。これは画期的。

書籍の電子化と言われている昨今ですがこの表現は紙ならではの、アナログならではの。デジタルの画面では、ページをめくるときの残像なんてありません。かいてこうせんは出ません。他にも、中に穴があいている本があったり、めくりやすい紙を使っていたり、本が反らないようにケースに入っていたり工夫や仕掛けが満載です。

「紙にしか出来ない事ってあるんだな〜」と、改めて思わせてくれる本でした。



着眼点の面白さ 着想の柔らかさ  
岡野祐三

赤瀬川原平氏の着眼と発想には「やられてばかり」いる。

『四角形の歴史』赤瀬川原平/毎日新聞社  
新しい本ではないが、たまたま見つけたこの本でもそうだった。犬は風景をどう見ているのか…をきっかけに、著者は風景について考える。

普通「風景」といったとき、何を思い浮かべるだろうか。富士山だったり、夕焼けシーンなどの光景? または「風景写真」…「泰西名画」などの絵画? 風景を「意識」し、さらに「鑑賞」の対象と考え始めたのは人類史でも最近のこと…と、どこかで聞いた。さまざまな「光景」が私達の身の周りに溢れている。しかしそれを気に止めて「風景」として観ることは日常ではまず無いのではないだろうか。まして風景がいつから存在しているのか…疑問を抱く人がどれだけいるだろう。

そんな疑問を思いついただけでなく、著者は「四角形の歴史」を通してその起源の説明まで試みる。曰わく、犬は自分の必要とする対象物だけを注視し、背景は見えていない。人



間もおそらく始めはそうであった。それを意識するのは、人類文明に「四角形」の枠が出現してから後のことだと…。額縁に依頼主の肖像を描いた余白に初めて背景を描き込んで、これが風景を意識するきっかけで、人が初めて風景だけを描いて鑑賞するのは「印象派」以降なのだそう。さらに著者は原始の時代にさかのぼって、直線から始まる「四角形」の出現?(発明?)の歴史まで考えを巡らせる。「子供の哲学/大人の絵本」シリーズの1冊だが、大人も「な〜るほど」の展開になっている。ホントかどうかはともかく、その納得の大きな部分が意表を突いた着想の面白さと、展開のうまさによっている。赤瀬川原平氏ならではの世界なのである。

赤瀬川原平氏は前衛芸術家から始まって画家・写真家でもあり、エッセイスト・芥川賞作家といった蒼々たる活動の幅であるが、「トマソン」「路上考現学」「老人力」などに代表される、意表を突く発想と表現が、次々と現れ枯れることがない。鋭い観察眼と無類の面白がり屋が同居してその世界観は肩から力の抜けて人を引きつけ続ける。

我が身に欠如したその着眼・着想・頭の柔らかさが、私はうらやましくて仕方がない。



「本」である事の面白さ。  
『100かいてのいえ』  
『ちか100かいてのいえ』  
いわいとしお 借成社  
山田純一

絵本という世界も、次から次へと新刊が発売される元気なジャンルではあるが、本当の意味で子どもたちの人気を勝ち得、何度も重版がかかる絵本は、実は少ない。

そんな中、発売から2年間で、57刷も刷られに刷られまくった絵本が有る。

それがこの『100かいてのいえ』という絵本だ。

この本は、まず、本を横にして前に置く。表紙を上から下へ下ろすようにひらく。

読み手は、主人公と一緒に、縦に長い見開きを下から上に、まるで100階建ての家を登って行くかのように、読み進めてゆく。そして、10階分上がり切るとページを上から下へとめくる。10階ごとに違う住人(生き物)が住み、その住人ごとに特色のある部屋を、その住人の生活を垣間みながら登ってゆく。と、100階で待っていたのは…

そして、そこから見える景色は…

ページをめくるという行為が、次の階は?次の階は?という子どもの好奇心を刺激し、細やかに描かれたイラストが、想像力と遊び心を刺激して。何度も何度もこの家を登って行く事を面白がる。

シリーズ2冊目の『ちか100かいてのいえ』も同じように本を横にして前に置き、今度はページを下から上にめくって行く。

主人公の女の子と一緒に、見開きを上から下へと読み進め地下深くへと降りて行く。

作者は少し前まで、メディアアーティストとしてデジタルの世界の最前線で活躍されていた岩井俊雄さん、ウゴウゴルーガやDSソフトのエレクトロプランクトン、ヤマハのTENORI\_ONなどを製作して来たマルチクリエイターでもある。僕が、かねてからリスペクトしている一人だ。「最近ナニしてんのかな?」と思っていたら…絵本作家なんかしてました。

出来上がってくる作品は、突飛で可笑しい(変)物ばかりなのに、中身は論理的で無駄がなく、全てに意味が有る。発想が柔軟で、目的のために取る手段の引き出しが尋常じゃなく幅広い。(結果、目的は最後までぶれない)技術的には最先端なのに高尚な壁がなく、スッと手が届くような柔らかい作品。そんな作風にいつも感心しています。

テレビの番組でも特集されているものを見た事がある。しゃべり方も物腰も柔らかいくせに、言ってる事が面白くて「なんだこのおじさ

んは?!」と驚愕したものです。この人の人間力にもリスペクトしてます。

あー。話が尽きない。えーと。つまり電子書籍だ、タブレット型端末だ。スマートフォンだ。と技術や物に振り回される自分が情けない。そういうことです。

面白さや好奇心は、技術や物ではなくて中身に在るのであって。器が足りていればなんにも、最新技術や最新機器でなくても十分。むしろ、面白さや好奇心の本質を、ドウすれば伝えられるか。アイデアと工夫。そこが大事なんだなー。

デザインも要はその「本質」とか「核」とか「伝えたい事」をいかに自然に、スッと贈れるか、深い所へ届けられるかが肝で、それは道具やメディアが変わろうともやる事は変わらないお仕事、という事です。

この絵本は、本でまだまだ色んな可能性があってアイデアと工夫次第でどこまでも面白くなるというお手本です。本づくりのプロと言う立場にいと意外と発想が凝り固まって、先が見えなくなってしまうものですね。創造の限界をあっさり作ってしまいがちな思考にもっと風を通さない。。。

脳が元気に、自由に創造できるように。楽しく、面白く、創造する幸せをもう一度。まとまった? てない?



「アイ・ラブ・カラフル・料理の本」  
沢田寛子

「料理の本」コーナーでまた出会ってしまった一冊の本。今日は「またか」と言われそうな、そんな一冊です。

一冊丸々、「タジン鍋」で作る料理を紹介した、正方形に近いこの本はカバーからして、とってもカラフル。男性スタッフからは、「料理の本にこんな色を使うなんて、考えられない」と一言。

でもこの本を店頭で見つけ、「何ていい色!と感動し手にとってパラパラとめくり、見開きごとの写真と、その色使いに「キャッホー!」と喜び「タジン鍋」も持っていないのにレジでお金を払ってしまった人が現実にここに存在するのです。だからこの本はこの世に出て来て良かったのだ、と私は一人で考えました。

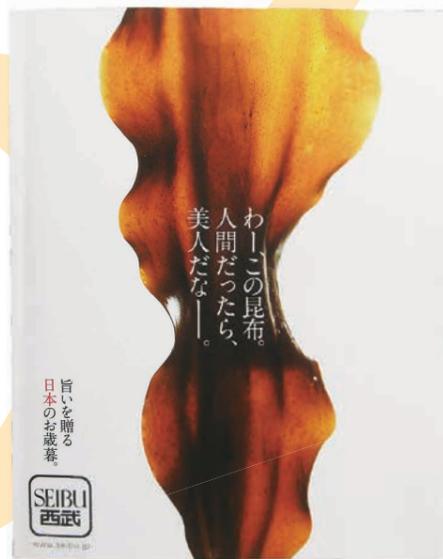
「タジン鍋」の故郷は、北西アフリカのモロッコです。一度見たら忘れられない、とんがり帽子のようなとてもかわいい形をしています。砂漠の先住民が、少ない水で美味しい煮込み料理を作るために考えた、と言われていました。食卓の真ん中にタジン鍋を置き、ちぎったパンでお肉や野菜をすくって食べるのが、モロッコの夕食だと本には紹介されていました。家族で一つの鍋を囲むのは、日本の情景に似ていますね。

本で紹介されている料理はバリエーションもとても豊かです。また料理によって写真の撮り方や、バックの色、テーブルクロスなどのセンスがとてもいいのもこの本の魅力となっています。

「あ〜、こんな食卓に招かれたい!」ではなく、自分で作って招かないとね。でもその前に、「タジン鍋」を買わないと…

# 思いがけず 出会った もの

こんなところに、  
お気に入り見つけた!



## 「旨いを贈る 日本のお歳暮」 沢田寛子

先日久しぶりに東横線に乗りました。  
普段通勤では小田急線を使っているの  
「この線にはどんな広告が見られるのかな」  
そんなことも、いつもとは違う路線に乗る楽しみにはあります。

わー、この昆布。  
人間だったら、  
美人だなー。

座ったとたんに飛び込んで来たのが、左上にかかっていた一枚の中  
吊り広告でした。  
衝撃に近い感動というのでしょうか。一目惚れでした。  
今年の「西武のお歳暮」は「日本の旨い味を贈る」をテーマに「旨み」  
にこだわったギフトを特集したそうです。この「旨み」、約100年前に日  
本人によって発見され、今では国際語ともなっています。素材の味を  
引き立たせ、また古くから日本の家庭で親しまれている味覚です。  
この広告のプレゼンの場面に自分も立ち会いたかった…  
みんなどんな反応だったのかなあ〜。そんなことにまで想像を巡らせ  
てしまうほど。実にイイです。  
それにしてもこのコピー、そしてこの美人の昆布。この広告を作った  
人と昆布は、どこで出会ったのでしょうか。  
中吊りを見た翌々日、西武にカタログをもらいにいきました。電車で  
見たのと同じ表紙。嬉しかった!

「今年も一年の感謝の気持ちを込めて  
お歳暮を贈る季節となりました」

今年は西武から届くお歳暮が多かったりして。

## 「自分の体の事、知ってます?」 大友敦史

今回のお気に入り「人体解剖図」です。  
解剖図…まあ、普段は進んで買いに行くような本ではないですね。  
書店に行ったら「話題の本」として入り口の近くに面展で積まれてい  
たので「え? 解剖図が話題の本?」と思い、なんとなく手に取った  
だけでした。  
しかし見てみると  
なんと見やすい。  
分かりやすい。  
仕事柄、解剖の図や写真を目にした事はありますが、これは分か  
りやすいです。この本を見た後に医学書コーナーに向かいましたが、  
やはりこの本は分かりやすい。  
まず全ページフルカラー。各ページ毎に大きくイラストが描かれて  
います。写真みたいにグロテスクでなく、少しさっぱりとした色使い  
で各部位を見やすく塗り分けられています。  
複雑な部分は詳細イラストと簡略図の両方が描かれています。全て  
のイラストを同じ人が一貫して描いているので、一冊の本を通して統  
一感が取れているのも要因の一つだと思います。  
イラストの横には、どの部位がどのような働きをするのかも分かり  
やすく丁寧に説明されています。もの凄く細かな所、専門的な部分ま  
で書かれているにも関わらず、とても理解しやすい。ルビも、多め  
にふられているので小学生でも高学年くらいなら読めそうです。学校  
で使われる事も想定した作りだと思います。  
そして何よりフルカラーのこのボリュームで1980円。安い! 体内の  
図を作るときこの本があったら作りやすかったろうな…と思わせるよ  
うな本でした。  
普通の生活での実用性は未知数ですが、話題の人体解剖図。  
一家に一冊、いかがでしょうか。

## 「青窠アルバム新聞広告」 岩崎邦好

「タイポグラフィの奥義」  
文字や写真を組上げて、情報を的確に視覚的に伝える技術。  
タイポグラフィとはビジュアルなコミュニケーションツールです。グラ  
フィックデザインの基本に横たわる土台のようなものです。デザインの骨  
組みといえます。  
骨組みとはスペースに文字、写真、イラスト、図版等、どのように配置  
するかの基本の枠組みです。建築で言えば構造体に関わり与えてゆく  
ようなものですが、構造がしっかりとしていないと、煩雑な紙面になり情  
報がスムーズに伝わりにくくなってしまいます。  
情報の質と表現という意味では論理的構造と感覚的構成を必要としま  
す。読みやすさ、見やすさととどまらず、情報の質や内容によって表現  
の仕方が変わってきます。理性や常識に捕らわれず、自由に感覚的に表  
現することがより伝わりやすい場合もあります。その場合、デザインの基  
準となるよりどころは、デザイナー本人の感性の中にしかありません。い  
つも感覚を磨いていないとできない芸当です。  
たまたま「青窠」のアルバム広告を見てまさに良い例だと思いました。  
この広告の命は、いかに歌の内容、アーティストの気持ちを的確に文字  
で伝えることができるかです。普段使いの言葉表現と、不思議な用い方  
をする言葉とが、赤裸々な内容をよりピュアに映しだし、共感の世界絵と  
導きます。その不思議で赤裸々な世界を、この二つの広告はうまく表現  
していると感じました。  
文字を縦、横だけでなく縦横に流れるように曲線で組み、また天地逆  
さしたり、鏡文字にしたりすることでその歌の世界をうまく表現してい  
ます。それも2バージョンで、二人のデザイナーがそれぞれの感性で表現  
したことが感じられないし、一人のバリエーションかも知れません。  
「うらねばならないという枠をつくりたがりますが、枠をとりはら  
い、ぶくことは、実はとてもむずかしいことです。  
人亦然り、この広告のデザイナーも亦然り。自由に遊ぶ感覚を身  
に感じます。自由に遊ぶためには、「感性を磨き表現する」  
の返す事ですかね。とにかくこの広告刺激されました。

## 「HERMÈSカタログ」 飛鳥井羊右

2010年、結婚した当時色々な方にお祝いの品をいただきました。そ  
の中の一つに、エルメスのペアマグカップが!! 宅配便で届いたの  
ですが、開けてびっくり! 箱の中に一緒にカタログセットが入ってい  
ました。  
エルメス製品を手にするのは初めてだったので、カタログセット  
が同封される事はこの時初めて知ったのですが、とても丁寧に作られ  
ていてちょっと驚きました。  
カタログにはモデルが身につけている製品の情報などが巻末に載っ  
ていますが、写真ページには一切情報が入ってなくて、写真集のよ  
うに見えます。他のページにはアーティストの紹介や読み物記事など  
も含まれていて、ファッション誌のような作りになっています。  
他に、「カレ」というスカーフのカタログが2冊とネクタイのカタロ  
グが1冊、あとは香水のサンプルが一つ…  
これらを商品購入者に1セットずつ付けているのでしょうか。こうい  
ったことがブランドのイメージを保つために必要な情報発信なのと思  
います。  
ブランドを作り、それを維持するのは難しいはずですが、高品質の  
情報発信をこまめに行うことでエルメスというブランドイメージを作り  
上げているのだと思います。もちろん製品の品質全てを高く保つこと  
は絶対で、それに加えてのイメージ展開が必要不可欠ですが、実際  
にそれをやるのは大変なことだと思います。  
カタログを見ていると金額的に高いと思われる商品もあります。で  
すが、品質に見合う値段だと思い購入する人がいるなら成立している  
訳です。  
僕にはあまり縁の無かった高級ブランドですが、「求めている人に  
届くように情報発信をする」ということは、我々の仕事にも通じる所が  
あると思いました。「お、これは良いな。こんど買おうかな」とか思う  
人に届けば成功なのかもしれません。ま、僕は「え〜!! これこんな  
値段するの!?!」と驚くくらいしかできませんでしたが(笑)



白川義員 世界百名山  
堀木一男

登山が趣味という人間ではない  
中学生の時林間学校で  
霧ヶ峰に連れて行かれたときも  
ひたすら山道を歩かされ地面ばかり眺めて  
この苦行はいつ終わるのかとばかり  
考えていたことがあった

あれから幾星霜、里山や森にでかけるのは  
大好きになった  
尾瀬や上高地にも連れて行かれ  
自然の美しさや そこにいるときの  
和む気持ちはなにものにも代え難い

ここ数年ネパールに行く機会が与えられたが  
飛行機でみた  
ヒマラヤの峰々が人々を引きつけるのは  
なんであろう

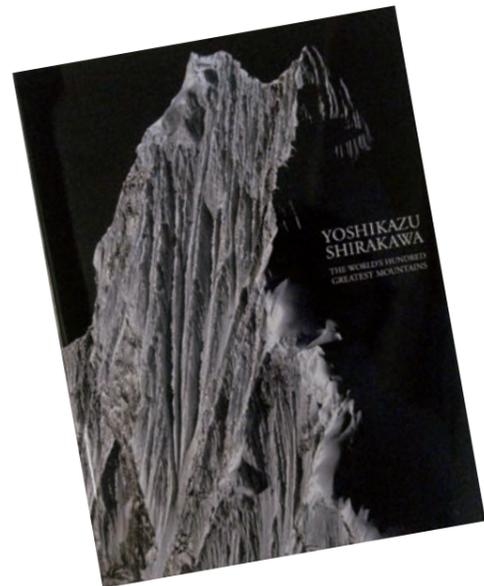
カトマンズからヘリでダウラギリの麓の  
村に飛び アンナプルナ山系の峯々の間を  
ヘリで漂ようときの 変貌する大自然の  
造形に神々の住まいを直感した

たまたまNHKの番組で白川が百名山の  
撮影に挑んでいる映像をみる機会があった

ネパール空軍の援助をうけて  
綿密なタイムスケジュールで日の出の時刻に  
あわせて山頂めがけて  
フライトするわけだが  
数分の遅れがいのちとりになる

地獄の籠のように燃え上がった  
真っ赤な山の姿をとらえるのは難しい  
8000m級の山並みをめざし  
カメラを座席にくくりつけ  
酸素マスクをしながら飛行機の窓を開けて  
撮影するなど 高い危険が伴う

できた写真を見ればわかる  
この人だけに許された  
まさに命がけの写真である  
山の写真が人を引きつけ息をのませる  
地球が生きていることを 見ることで  
魂の深いところに届く感動があることが  
伝わってくる映像である  
印刷が印刷を超えている素晴らしい



ブルーノ・タウト「熱海の家」  
堀木一男

岩波新書「日本美の再発見」を読んだのはもう30年も昔のことである。  
その頃デザインの勉強会で建築家のライトのことなど学んでいた僕は、  
IDの仕事をしていたM氏に多分勧められたのだと思う。著者のブルー  
ノ・タウトはドイツでは表現主義の建築家として名をなしていたが、当  
時ドイツに台頭してきたナチス政権をおそれて来日した。高崎に住まい  
工芸試験場で指導を行い、日本各地を旅行して、日本の中の美しいも  
のについて書き留めたものが「日本美の再発見」である。

僕が驚いたのは、「津軽のごぎん」や、農婦が着た野良着である「緋」  
などの美しさについて触れている点だ。日本民芸館の柳宗悦が収集した  
それらを何度も見ていたが、なにをどう感じたらよいか全く判らなかつ  
た。われわれ日本人は欧米の文化に親しみ学ぶことが多いが、和の世  
界の受容の仕方を身につけていない。「緋」にしても「伊勢神宮」にし  
ても何が日本的な美であるかわからなかった。そのまっすぐで柔らかい  
視点を教えてくれたのがタウトである。

タウトは在日中、建築家としては不遇であった。桂離宮や伊勢神宮な  
どとの出会いがより彼を豊かにしたことは想像に難くないが、実際には  
建築に手を染めたのは、わずか1件、それも部分である。その貴重な建  
築が旧日向別邸である。

熱海駅から海側に徒歩10分程度か。今は熱海市が監理している。予約  
が必要であるが、電話をかけて運が良いと比較的早く見ることができる。

なんだ！これは？———ストランドビーストの世界  
岡野祐三

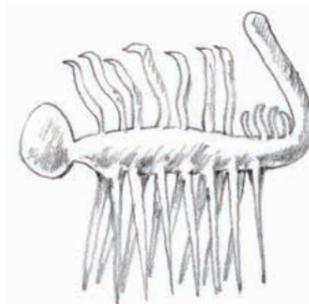
かつて科学雑誌「Newton」の仕事をしていた時、「ハルキゲニア\*注1」  
という古代生物に初めて出会って衝撃を受けた。その形は想像を超えた  
奇天烈さだった。

近年それとよく似たショックを受けたのが、テオ・ヤンセンという人が  
作った「ストランドビースト」だ。

波打ち際の砂浜に佇むその奇妙な姿は、機械にも生命体にも見えて  
強烈に惹かれる光景だった。風をエネルギーとして動くのだという。

大きくて複雑に見えるが、基本構造は案外単純そうで、どう見ても進  
化途上の形態。そのあたりがハルキゲニアとよく似ている。

実際に「ストランドビースト」はヤンセンがコンピュータ上の単純な  
仮想生物から始めて、プラスチックチューブで実態を持った構造体を作り  
出してから何世代にもわたり、まさに進化を続けている。その過程を  
まとめた系統樹から見て取れるのは、やはり生命進化への工学的かつ  
芸術的アプローチだ。物理学と生物学を融合したようなものすごく奇妙  
な形は、テクノロジーとアートの枠を超えて、太古の生命体の試行錯誤  
を感じてしまう。



もちろん進化が何らかの理由で止まり、  
文字通り絶滅してしまう可能性も  
高い。それも含めてテオ・ヤンセン  
が「ストランドビースト」から発する  
メッセージは、良いも悪いもなくて  
深い。ここに紹介したのは入手しやす  
い「大人の科学マガジン別冊/学研」  
だが、既に様々なところ\*注2で取り上  
げられ紹介されている。

小グループ毎に解説してもらえが、解説ボランティアはよく勉強してい  
て楽しめる。はじめに45分のビデオ映像をじっくり見せられるが、これ  
が良くできていてタウトをだれでも親しみやすいものにしてくれる。

タウトがこよなく日本を愛したことが切々と伝わってくるような、旧日  
向別邸はちょっと胸をうたれる建築だ。日本で丸ごと1軒建築することが  
できたらと、なにやら無念の思いが感じられた。



\*注1 カナダ・プリティッシュコロンビア  
州のバーセス頁岩（カンブリア紀中期  
後半、約5億0,500万年前に属す）で化石  
が発見された（1911年）古生物。当初の  
復元像は誤りで、上下と前後を逆さまに  
したものであったことが判明。私が古生物  
学の洋書で初めて見たハルキゲニアはこ  
の上下逆さまの復元図であったが、実  
に見事な臨場感のある絵だった。  
\*注2 2006年BMWのCMで紹介された。  
ビーストが動く様子やヤンセンの姿を見る  
ことができる。YouTubeには他にも様々  
な動画が上げられている。



# 社会 自然のなかで生きる人間、 人の中で生きる人間。

300円と無料  
——『BIG ISSUE』と Free Paper  
岡野祐三

『BIG ISSUE』を買ってみた。この雑誌はホームレスの人たちの自立支援の為に2003年創刊されたもので、書店ではなく街頭でホームレス自身の手で販売されている。雑誌を売ることで彼らに「仕事」と「収入」をもたらすこの支援の仕組みを、私は創刊時に各メディアで知り「妙案を考える人がいるものだ…」と感心した覚えがある。好意的ではあったが販売者を見かけたこともなく、実際には距離を置いたスタンスだった。

ところが、このところ通勤途上の駅近くに販売者が立つようになった。暑い日も寒い日も『BIG ISSUE』を掲げて立ち続けている販売者。夕方など公園のベンチで休んでいる、まさにホームレスな光景も。販売者が替わったときには、その事情など想像してしまう。なにより気にかかったのは、買い求めている人を一人も見かけなかったことだ。もし売れ行きが芳しくないのなら、自立支援にならないのではないかな？

私たちの現在身の回りではフリーペーパーが溢れ、商業雑誌は低迷している。今まで親しんできた印刷媒体はどうやら行き詰まりつつあり、だから私たちグラフィック・デザイナーも厳しい時代を過ごしている。この状況は『BIG ISSUE』にとってもおそらく同じだろう。それでも売れる魅力ある内容なのか…気になってしまう。一度読んでみよう…と思いついて買ったのだが、路上で販売するおにいさんに声をかけるのは思いの外ハードルが高かった。そのこともまたこの雑誌にとって逆風のひとつと思えてしまう。

『BIG ISSUE』139号/A4サイズ/フルカラー32ページ。  
売価300円の内160円が販売者に渡るシステムである。  
仮に1日20冊売れたとして手元に残るのは3200円の収入だ。もっと売れば良いのだろうか…どうなのだろう。

表紙は毎号、海外の映画スターやミュージシャンなど豪華とも言える人々が飾る。インタビューの対象も、執筆者の顔ぶれも内外の著名な人たちが多く、考えていたより贅沢だと思った。この雑誌が元タイギリスで始めて成功している『BIG ISSUE』のモデルを、日本に移入したもの…という由来を考えると納得できる。記事の融通がきくのだろう。

街頭で『BIG ISSUE』売っている販売者の記事があったり、おおむねまじめで読み応えのある内容で構成されている。誌面全体の印象はそこそこのフリーペーパー風といったところか。

商業広告は無く、実質29ページ程が編集記事となっている。制作・運営の費用のことを思うと、この雑誌が取材される側、執筆・制作する側、サポーターなどの「善意」「好意」によって支えられているだろうことは容易に想像できる。関係者のガンバリは伝わってくる。そして社会的関心のある善意の読者にとって、300円に対するこの内容は「無駄」ではないだろう。だが良くできたフリーペーパーと比べて、圧倒的な質量とまでは行っていない。

Web上などでは『BIG ISSUE』に関して、批判的な意見も多いことが分かる。物事には賛否があって当たり前だが、私はそれでもなお好意的な側に立っていようと思う。だから少なからず行く末を心配しているわけだが、印刷媒体そのものが縮小している中で、早晚次ぎなる対応、新しいアイデア、別なシステムが求められるのではないかな…とも思った。

「東京公園散歩」矢部智子  
「イギリス・ユートピア思想——ウィリアム・モリス」大平真理子 他  
堀木一男

確か経済評論家の内橋克人だったと思うが、本を2冊並行して読むと新しい発見があるといっていたように思う。

クレマチスの丘にあるアート系の本屋で思わず買った本が、「東京公園散歩」だ。パラパラ繰ってみるとわかるが、東京にある見事な大公園のガイドブックなのだ。大公園巡りはやみつきの僕の趣味で、横浜や東京の里山や公園をまわって、その景観の美しさやバードウォッチングを楽しんでいる。

この本は、おなじみの新宿御苑や昭和記念公園、砧公園など広大で、樹木の生育の見事さにほれほれする公園をいくつも紹介しているわけだが、ごろりと寝転がるのが大切と僕と同じ視点であるところが嬉しい。なんでこんなに公園や樹木そして鳥に惹かれるのだろうと思っていたら、もう1冊の「イギリス・ユートピア思想」の中のウィリアム・モリスを読んでみた。

ちょうど幕末の坂本龍馬と同時代にイギリスでは社会変革のためにモリスが奮闘していたわけなのだ。産業革命幕進中で、貧困層が多く何やら現代の日本に通じそうな社会背景で、未来を見通すためにユートピア思想が必要であったようだ。そのユートピア思想は豊かな自然の観察力と健康な社会構想力からなっている。モリスは多忙な生活の中で、自ら自然に癒され様々な壁紙のデザインに取り組んだわけだが、川や動植物の生態系が人間の暮らしにどれだけ必要か、身近に迫ってくる宅地開発業者の緑地破壊を目の当たりにして、生涯戦い続けた。

彼が求めたのは、良い自然環境の中で、喜びに満ちた人間的な労働の質の問題なのである。思わず何故公園の緑に惹かれるのか、了解できたのであった。



# 印刷 活版の魅力と、 色数制限の可能性。

1,2&3色  
デザインコレクション 2  
田島未久歩

この本は、通っていた美術予備校の先生がオススメしていたものです。「色面構成の参考になるよ」と聞いて、色面構成が苦手だった私は、あわてて本のタイトルをエスキース帳に書き込んだ覚えがあります。

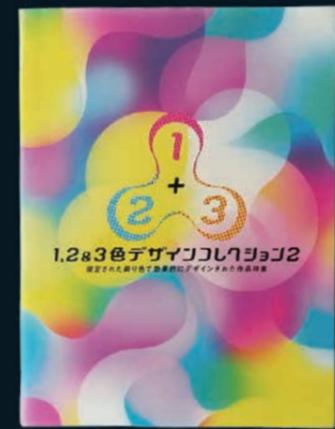
CMYKの4色印刷へのアンチテーゼとして企画されたこの本。1色から3色の、色数を絞った印刷物ばかりが載せられています。それも、世界中から応募された中の、選りすぐりの作品というのが面白い！もともとローコストを目的とした1~3色印刷ですが、上手に使うと新鮮な感じをあたえられるということがこの作品集を見ていると、よく分かります。私がこの本を開くのは専ら色の組み合わせに悩んだ時です。本の中の作品を眺めて、自分の中になかった色の組み合わせを見つけて真似をしてみたり。

この色とこの色を合わせるなんて！しかもそれがカッコイイなんて！と、何度開いても驚いてしまいます。

様々な国の作品が載せられているので、日本ではあまり見られないような色の取り合わせを見ることができるのも、この本の魅力です。

また、この本の序文にも書かれていたことですが、色数を少なくすることで色で誤摩化すということができなくなり、他の構成要素が際立ってくるという効果もありそうです。作り手にはプレッシャーでもあります。やりがいにつながる、面白い特長であると思います。

制限を設けることで、その中でいかに魅力的なものを作れるかと試行錯誤する面白さ。準備万端で行くキャンプも良いけれど、少ない道具で「これを、こうしたら…」とあれこれやってみるのも楽しい、というのと似ているでしょうか。



活版印刷からの遠近法  
岡野祐三

仕事中心いつも聞いているFMで紹介しているのを聞いて、すぐ探したのがこの写真集だ。『文字の母たち』…ラジオから聞こえてきた書名にもぐっと心を引かれた。新本が見あたらずAmazonで古本を購入。

書物の奥深い成り立ちを辿る時、著者（港千尋）は今では遠くなくなってしまった「活字」「活版」に行き着き、魅了される。そしてその世界を丹念に写し残そうと試みた。著者は批評家であり写真家でもあった。

写真はフランス国立印刷所で、2006年に活版部門が大幅縮小される直前に撮影されている。この印刷所はグーテンベルグの印刷術発明とほとんど同じ500年近くの歴史を持ち、ガラモン書体のクロード・ガラモンも在籍していたところでもある。縮小といっても閉鎖に等しいわは歴史の終焉…の直前とあっては、撮影の時間はまったく足りなかったに違いない。半分近くはカラー写真だが、モノクロの方が濃密な質感が「活字」のもつ鉛とインクのイメージとびったり重なって印象的だ。

特に「活版印刷」の世界の圧倒的な物（ブツ即ち金属）の量感に、私もかつて見た活版印刷の現場や空気を思い返し感動する。書物を生み出す過程が、もとは圧倒的に「物」のある風景であり、物理的に組み上げられた世界だったということを改めて思う。その様々な物に係わる、それぞれに専門分化した技術と、多くの人々の人生が存在した。濃密な写真の向こうに、そうした深い歴史を感じ取ることができる。昨今の「電子本」の世界から感じる軽快なスマートさとは、真逆のイメージだ。

…などと思っていたら、同じ著者のもう1冊を見つけた。『書物の変——グーテンベルグの時代』。実は購入間もなくまだ読んでいないが、併せて紹介しておきたい。

書名からも想像できるように、書物の「電子本」化をとりあげている。物が支えていた情報（グーテンベルグ）から電子による情報（グーグル）への移行を見据えた内容だ。このもう1冊がなかったら、先の写真集は下手をするとただ記録やノスタルジーに見えてしまうかもしれない。

『文字の母たち』から「電子本」。この2点間を結ぶ著者の視線が書物への思いを中心に、人に何をもちたまた何を失わせるのか…どう論評されているのか期待している。活版印刷の歴史を見届けた人が、現在の書物の状況を語るのだ。この遠近法的な見方に注目し、私も考えたい。



「PUSH PIN」

山田純一

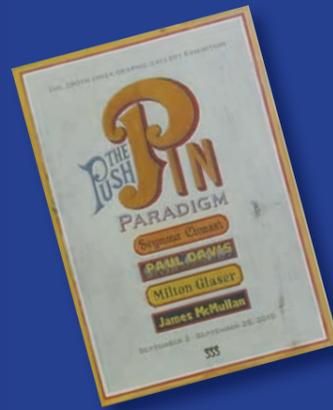
1950年代初頭からアメリカで誕生したデザイン・グループ「PUSH PIN」。その制作スタイル、表現力、作品群はアメリカのグラフィック界に衝撃を与え、そのまま日本にも伝わった。

「絵好き」を自負する僕ですが、その視線や興味は、ほとんどアニメや漫画の方ばかり向いていて「イラストレーション」については全くの無知。勉強不足。

ふらりと寄った銀座グラフィックギャラリーで公開されていた展覧会「THE Push Pin PARADIGM」。

そこには、粟津潔、宇野亜喜良、横尾忠則… えーと、名前が出て来ないけど、他にも60年代から活躍して来たデザイナー、イラストレーターの中に「見た事ある」テイストが盛り沢山。日本のデザイン、イラストレーションに強烈な影響を与えた事が「見て」わかる。あらゆるイラストレーションの原点があり、今でも遜色無く使えるアイデアの博覧会。見本市。バーゲンセール。

「PUSH PIN」の活動期間の中から数多くのイラストレーター、グラフィックデザイナーが登場しているようですが、今回の展覧会では



「シーモア・クワスト」「ミルトン・グレーザー」「ポール・デイビス」「ジェームズ・マクミラン」の四人をピックアップして印刷物や原画などを交えて、200点ほど展示していました。しかし、この四人が描いてきた様々な表現、あらゆるタッチのイラストに圧倒されます。

ブラックなユーモアから、ただフザケただけのようなタッチ。イラストの中に吸い込まれるような表現から平面を飛び出し、迫ってくるような圧力を感じるタッチ。時間や感情、雰囲気まで表現しうる表現の幅。デフォルトされていくことであらわになる内面。テーマ。メッセージ。イラストレーションで、まだまだ何でも出来る気がして来た。

反面。最近見て来たグラフィックデザインやイラストの中にも「プッシュピンが原点だったのか」と思えるものいくつか。様々なデザインも、手描きがデジタルになり、より細かく、洗練されてはいるが、その基本となるアイデアや表現の多くは、まだ、ここ、この範疇から脱する事が出来ていないのか？ とも思えた。とはいえ、こっちが先だからオリジナルで、以降はマネ。とかでは無く。過去の様々なテクニックを、知ってやるのと知らないでやれないのでは大きく違う。たとえ同じ様に描いても、時代の空気を含むことで今の表現になっていくと思う。色々見て、学んで、片っ端から引き出しに放り込んでおきたい。

works from other designers

キギ

田島未久歩

最初は、1枚のフライヤー。

「オリッサ・オディッシー 東インドの踊りと暮ら展」という展示会の開催を伝えるそのフライヤーは、早くも無難なデザインのマニュアルを探し始めかけていた私の目に、はっとするほど鮮やかに映りました。

「デザインは正解がないからこそ、いくらでも面白くなる。」そのことを私に教えてくれたこのフライヤーは、植原亮輔さんのデザインでした。

次は、gggで開かれた「TDC展」。

様々なタイポグラフィ作品の中に、渡邊良重さんの「12 Letters」がありました。

一度触れたら忘れない、やさしくて、どこかひっそりとした、渡邊良重さんの美しい世界。渡邊さんの作品も、ものをつくることの喜びや、自由であることの面白さをはっきりと感じさせてくれるものでした。

そうして私にとって自由の象徴となっていたお2人が、「キギ」として再スタートされました。その出発点である今回の「キギ展」には、

今までにお二人がそれぞれ、あるいは共同で取り組まれた作品が会場に所狭しと展示されていました。そのどれもがユニークで、じっくり見たいものばかり。

しかしファンの多いお二人の展示会は当たり前を訪れる人も多く、ひとつの作品の前に何分も、というわけにはいきません。帰り掛けには迷わず作品集を購入しました。

実際に貼り重ねているようにしか見えないカラージュ風のカレンダー、透けることで展開していく絵本、ジャンプの詰め替え用パッケージ

ジから生まれた花瓶、鏡の映りこみを利用したカップ&ソーサーなどなど…

キギの作品集を眺めていると、植原さんのフライヤーや渡邊さんの作品を目にしたときのわくわくした気持ちがよみがえります。

そして本を閉じたときには、「やっぱりデザインは面白い!」と、にんまりしてしまうのです。

(巻末には植原さんと渡邊さんへのインタビューも載っていて、「キギ」という名前の由来や、デザインへの考えなど、とても興味深いです。気になる方はぜひ。)



日本グラフィックデザイン協会アンケート集

堀木一男



こりゃなんじゃと思ってあけてみたらなんと日本グラフィックデザイン協会のメンバーによるアンケートのお答えを綴じた本なのだ。メンバーのかなりの方が手書き文字で書いた物が見えるのがおもしろい。時代に対してどう取り組むか ひとり一人の答えがおもしろい。手書きにするとどこかの学校の文集のようなありふれた体裁になるわけだが、手書きになることで裸にされる部分があるように思った。でまかしのきかないストレートなコミュニケーションが痛快である。薄っぺらい人間に見えようと いろいろ幻惑しようとする人がみえてしまう。編集仕掛け人のフツオの感覚の中に潜むバランス感覚が おみごとという感じである。

「100%に近い手作りのもの」

沢田寛子

懐かしい時代、懐かしい物は人によってそれぞれです。その人にとっては、とても大切な時間や物でもその懐かしさを、丸ごと全部分かち合うことは普段なかなかありません。

でもあったのです！それはね、23年前にコンビビアで作った社員旅行のしおり。まだまだパソコンで仕事をしていなかった時代。ファックスもやっと入ったばかりのそんな時代。たった一泊の旅行のために、みんなで分担してそれぞれの見開きを作りました。どんなページになるかは、出来上がってみてからのお楽しみです。何ともゆるい、自由度いっぱい冊子です。しかもみんなで手作り。

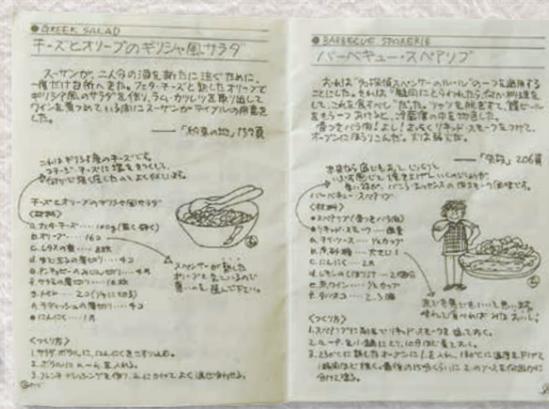
全20ページになるようにページ割を考えてそれぞれが分担して、イラストや

原稿を書いて、向きも考えて、ページ割に沿って全部置いてみる。そしてA3で両面コピーする。カットして、表紙つけて出来上がり！表紙は確か「きらびき」という、紙見本にあった紙。

仕事が終わってからの作業開始は9時を回ってからでした。「秋雨の山形路」と書かれた扉ページ。日程には、出発は夜の10:00とありました。



出来たてのしおりを持つてのギリギリセーフの出発。雨の中、全員を乗せて走った「ハイエース」。河原で参加した「芋煮会」。帰りに立ち寄った美味しいお蕎麦屋さん。当時参加したスタッフが共有した懐かしい時間でした。そして一言「やっぱり手作りのものはいいね〜」。そして別の声。「あのお蕎麦屋さんにもう一度いきたい〜」。





CONVIVIA COLOR—7

# OMEGANE vol.2 オメガネ 2

発行 株式会社デザインコンビビア  
〒162-0064 東京都新宿区市谷仲之町 3-22 ワールドビル2階  
TEL. 03-3358-1455  
<http://www.convivia.co.jp/> <http://convivia.blog.shinobi.jp/>

印刷 株式会社プリントバック

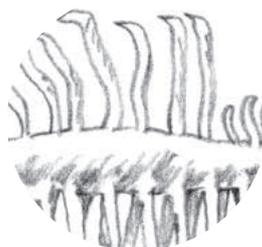
編集・デザイン  
沢田寛子 / 田島未久歩

本誌またはウェブ上のテキスト、及び画像の無断転用を禁じます。登場する物は個人的に購入し所有する物です。詳細についてのお問い合わせはお控えください。

p11  
ブルーノ・タウト「熱海の家」



p11  
なんだ!これは?  
———ストランドビーストの世界



p12  
300円と無料  
——『BIG ISSUE』と Free Paper



沢田  
vol.2は2009～2011年のブログから集めました。初期の段階の分類・グループ分けはテーブルをいっばいに使って毎回ワイワイと楽しく!お互いの作りたい誌面のイメージが共有出来ました!

田島  
2012年入社のお気に入りも、特別に収録させていただきました。女性2人でアイデアを出し合いながら制作してきたvol.2。「これ気になる!」というものを見つけていただけたら嬉しいです。



眼がね:物を見て、その善悪・可否を考え定めること。鑑識。めきき。(広辞苑より) 週一回「お気に入り」というテーマで、スタッフが順番にモノやコトを持ち寄ります。それらをブログで発表してきました。この「OMEGANE」は、それぞれの関心が様々に語られているブログの内容を少し編集して、まとめたものです。

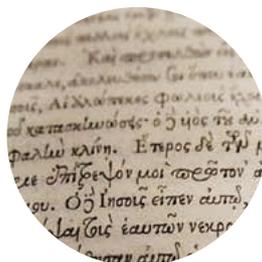
p12  
「東京公園散歩」矢部智子  
「イギリス・ユートピア思想——ウィリアム・モリス」大平真理子 他



p13  
1,2&3色デザインコレクション 2



p13  
活版印刷からの遠近法



p14  
「PUSH PIN」



p14  
キギ



p15  
日本グラフィックデザイン協会  
アンケート集



p15  
「100%に近い手作りのもの」

